

「僕」と静雄―佐藤泰志『きみの鳥はうたえる』論―

*

小田島 本有

Motoari ODAJIMA

” I ” and shizuo

—A study of Satoh Yasushi “And Your Bird Can Sing (Kimi no tori wa utaeru)” —

一

『きみの鳥はうたえる』は一九八一年の『文藝』九月号に発表された。作者が三十二歳の時の作品である。ちなみに翌年三月、単行本『きみの鳥はうたえる』が表題作と「草の響き」を収録した形で河出書房新社から刊行されている。なお、この作品は佐藤泰志の最初の芥川賞候補としてノミネートされたことでも知られている。

文庫本は二〇一一年五月に出版されているが、解説を詩人の井坂洋子が書いている。その中で井坂は作品に対して抱いた疑問点を率直に述べている。煩瑣を厭わず引用したい。

二

それにしても、「きみの鳥はうたえる」という作品は不思議だ。たいていの人が感じるであろう疑問をあえて口にすれば、なぜ主人公は友人の「静雄」に恋人の「佐知子」を譲ったのだろうか。漱石の「こころ」を意識して書かれたのかどうかはわからないけれども、主人公は小我(エゴ)によって動いていない。「佐知子」が最初に主人公に誘いをかける。主人公は彼女に魅かれるのに、約束をすっぱかすのも不思議だ。自分のエゴ、もっと簡単にいえば欲望に忠実ではなく一拍置くのである。作者はその謎めいた行動にメスを入れない。

解き明かすと複雑なことになってしまう心理を、どのような行為をとったかということによって示し、主人公に影の厚みをもたせている。もしかしたら主

人公は、自分の中の「もうひとりの自分」に身を寄せているのだろうか。「もうひとりの自分」からの抑制を常にかけている男なのだろうか。

(解説 三人傘のゆくえ)

ここで井坂は疑問を二つ提示している。一点目は主人公がなぜ静雄に佐知子を譲ったのか、二点目はなぜ主人公が佐知子との約束を反故にするのかということである。「もうひとりの自分」からの抑制を感じる男」として主人公「僕」を想定する視点は興味深いが、残念ながら井坂はそれ以上そのことについて言及してはいない。

福間健二は、主人公「僕」についてこう述べている。

読みすすんでいくとわかるが、「僕」は、造型的にこういう人間だからこういうことをするのではなく、こういうことをするからこういう人間なのだというふう動いていく。いわば性格がシニフィエで決められていない。

『佐藤泰志 そこに彼はいた』、河出書房新社、二〇一四・一一

井坂が指摘した主人公の「謎めいた行動」のあり方を福間は別の言い方で表現しているといつて良いだろう。「シニフィエ」とはソシユールによって定義された言語学用語であり、通常「記号内容」「所記」と訳されている。つまりまず性格が規定されていて、それに沿った形で主人公が行動しているわけではないということである。

確かに読者がこの作品を読んだとき、井坂が指摘している箇所などは主人公の不可解な行動として強く印象づけられる。「僕」自身が自分の行動について丁寧に説明しているわけではないからだ。だが、「僕」の断片的な言葉に注目していくと、井坂の提出した疑問点は類推が可能なのではないか。

まず、順序は逆になるが、二点目の疑問から考えてみたい。すなわち、なぜ主人公の「僕」は心魅かれた佐知子と九時半に合う約束をしたにもかかわらず、それをすっぱかしてしまったのか。

「僕」と佐知子は同じ書店で働く同僚であった。「僕」は店長と佐知子に偶然出会う。「僕」はこの日店を無断欠勤していた。店長はそのことを咎め、佐知子と共にその場を立ち去っていく。その際、すれ違いざま佐知子が腕を伸ばし、「僕」の肘を触った。これを彼女からの誘いと受け取った「僕」は勘違いの可能性もあるとして、彼女を待ちながら数を数え始めた。一二〇になったらその場を立ち去ろうとしたのである。数え終わるとそこに佐知子が「心が通じたわ」と言って駆けつけた。この姿を見て「僕」は「かわいい女だな」と感じている。きっかけを作ったのは佐知子の方だった。そして、その後の二人の会話を見ても、佐知子が積極的であることが分かる。

「一日、なにをしていたの？」

「今、映画館からでてきたところだよ」

「今度誘って」

「いいよ」といって上気した耳朶を見た。そして、でもただじゃすまないぜ、とふざけるつもりでいうと、こわばった怒った目つきで僕を見返してきた。少したつてから、いいわ、誘ってよ、とうわずった声をだした。

「そうか、それならいいよ」と僕はいった。

ところで店長にどんな嘘をついて戻ってきたんだ、ときくと、あんたにはど

うでもいいことよ、安っぽい女に見ないで、といった。

「それより今夜、会いたいわ」

それなら、と僕はアラの店へ行く道順を、卓球場のガラス窓に指で書いてやった。

「九時半でいいかい」

「わかったわ。約束忘れないで」

「行くよ」

「映画の約束もよ」

「そっちこそ」というと、また彼女は怒ったような目つきになった。

「からかっているのね」

「まじめだよ」

そのときには僕はほとんど真剣な気持になっていた。

(傍線・小田島)

ここで彼女は「僕」に二つの要求をしている。一つは映画に誘って欲しいこと、もう一つは今夜会いたいということである。

注目したいのは、「でもただじゃすまないぜ」という「僕」の言葉を聞いて、彼女が「こわばった怒った目つき」になっているという点である。ここは佐知子にある種の緊張感が走ったと見るべきだろう。「誘ってよ」と言ったときは声がうわずっている。そもそも二人が接近するきっかけを作ったのは佐知子の方であり、彼女は真剣だったのである。「安っぽい女に見ないで」という言葉も注意する必要がある。これから二人が会う約束をしたのは九時半であり、このあとどうなるか彼女なりに予測は可能だった。

一方の「僕」も「ほとんど真剣な気持」になっている。そして「僕」はいったん家に戻るのだが、そのとき「僕」は佐知子との約束を思い出す。「会いにでかけていれば、ただですまなくなりそうだった」との一文がある。「僕」は同じ言葉彼女の前でふざけ気味に発したのだが、もはや冗談では済まされない状態に「僕」も陥っていた。そして佐知子との性交場面を想像したりもしている。そして「すっぱかそうかどうか」と考えているうちに眠ってしまった。その後いったん目覚めるがその時点で十時になっており、既に約束の時間は過ぎていた。確認しておきたいのは、佐知子との約束後、佐知子とは今後ただごとでは済まされないということを彼女の真剣な表情から感じ取り、「僕」が逡巡してしまった

ということである。目覚めたとき時間を過ぎていたことが、約束をすつぽかすい口実になったのだった。

そもそも親しくない女を待ったのは「僕」にとって初めての経験である。そしてのちに静雄のみならず、アラも彼女を「いい女」と言っている。そういう彼女とにわかに関係に陥ることにある種の躊躇が生まれたのはやむをえない部分があった。しかも、佐知子が店長と深い関係にあったことも、幾分か影響していたのだろう。

三

それでは井坂が抱いた疑問の一点目、なぜ「僕」は静雄に恋人の佐知子を譲ったのか、について考えてみたい。井坂は、主人公が同僚との「抗争ごっこ」（事実、「僕」と同僚の間では暴力が介在していた）の助っ人として静雄を頼んでいる事実に注目してこう述べる。

そういうことを考えると、「静雄」は義兄弟のようなものであり、弟分に「俺の女」を譲る気のいい兄貴分を演じたいのかと思ってしまう。

着眼点としては面白いが、ここには留保が必要だ。

この作品を考える場合、「僕」と静雄の関係そのものを踏まえる必要があるだろう。

この二人はアイスクリーム会社の冷凍倉庫で働いているときに知り合っているが、倉庫に入るときの格好を贋もののエスキモーみたいだと静雄がだしぬけに言ったときに「僕はいつが好きになった」という。その後、「僕」からの提案で二人の共同生活が始まるが、静雄は失業保険が切れた状態で、もっぱら「僕」の収入だけで生活している。静雄はしばしば兄に借金をしようとするが兄からは働けと言われる始末である。「僕」は静雄が働いていないことを気に病んでいるのを承知しているが、あえてそのことに触れることもない。

静雄はもともと口数が多いほうではない。当初「僕」はそれが「あいつに語尾の重い田舎なまりが残っているせいだろう」と思っていたが、この頃それが「誤解」だと分かり始めてきた。だからといって、静雄があまり話さないことで「僕」

が居心地の悪さを覚えることもなかった。

「僕」はいつたい何を理解したのか。それは静雄の寡黙が彼の身内のことと関連しているのだろうということである。

静雄が母親をすてた、というのははおおげさだが、ある日一方的に別々に暮すことにきめて、母親には何も知らせずにそのアパートをでた、という話は僕も知っていた。何ヶ月かたって、母親は叔母のところへ行ってしまった。その話をきいたとき、よつぽど僕は、なぜそんなことになったのか、詮索好きな男みたいになぜねようとしたことがある。でも結局、僕は何もきかなかつたし、静雄もお袋は身体が弱っている、といっただけでそれ以上はいわなかった。

母親を捨てたというのは穏やかではない。当然のことながら「僕」はそれを尋ねようとした。ところが、静雄はやんわりとその問いを避けたのである。これ以上他人のプライバシーに関わることには深入りするまい。そういう意識が「僕」の側に生まれたのである。

母親を捨てたとはいうものの、静雄はしばしば母親に手紙を書いている。表書きは叔母の住所宛である。いつたい何が書かれてあるのかは伺い知れない。のちにこの母親は精神病院に運ばれることになるが、叔母からの手紙では母親は「わたしがすべて悪かったのだ」とつぶやくばかりだったという。この母子の間にいつたい何があったのだろうか。

静雄は「僕」にも、後には佐知子にも叔母の住む漁港へ行かないかと誘っている。「僕」は気乗りがしないので断った。一方、佐知子はこのことを取り上げ、静雄を相当なマザー・コンプレックスだと本人の前で言い放った。この言葉に静雄は腹を立てる。佐知子は後にこの一件について後悔する発言をしている。いずれにせよ、マザー・コンプレックスという言葉は静雄にとって一番痛い言葉だったようだ。断定的なことは言えないが、母親は息子にあまりにも干渉しすぎ（過保護と言ってよいかもしい）、その結果息子がそのことに耐えられなかったのではないか。だが、もともと優しい心の持ち主であった静雄は心のどこかで母親を捨てた事実を悔いていた。

母親の入院を知り、静雄は翌朝そちらに向かうことになったが、その前日静雄と「僕」は飲んだ。静雄はがぶ飲み状態だったが、「なぜ母さんはこんなふう

苦しまなければならぬんだ」「俺のお袋はせがれたちにずっと見捨てられてきたんだ」と言っている。静雄にとつて母親が精神病院に入院し、世間からそういう目で見られることが耐え難かったようだ。そして、母親を見捨てたことが結果的に母親を追い詰める結果になってしまったことを悔いているのである。

叔母からの手紙が届いたのと前後して静雄の兄も「僕」のもとを訪れていた。いずれも母親の入院を知らせるためであったが、このとき静雄は海水浴に出かけていて数日間不在だった。帰宅後そのことを知らされ、泥酔する静雄に対して佐知子は、「でもあんたが悪いのは海水浴へ行ったことなんかじゃないわ、あんたはきつとやらねばならなかったことをやらなかったんだわ」と述べていた。この佐知子の言葉は核心を突いている。

なぜ、静雄があれほど泥酔し、後悔の言葉を吐いたのか。おそらく彼は母親を見捨てたことをたとえ仕方がなかったとしても、心の中で良心の呵責を感じていたのである。しばしば彼が母親に向けて手紙を書いていたことがそのことを証明している。そしてそれだけでは不十分であり、直接顔を合わせなければ根本的な解決にはなりえないことを彼は知っていた。だから、彼は「僕」や佐知子に叔母の住む漁港へ行かないかと誘っていたのだ。目的は叔母ではない、母親だった。だが、本当にそれが必要なことであれば、彼はたとえ一人であっても訪れるべきだった。だが、彼にはそれができず、いたずらに時間が過ぎていった。母親にしてみれば息子が会ってくれないということは、自分が息子に許されていないことを意味していた。佐知子という静雄が「やらねばならなかったこと」とはこのことに他ならない。

子供が成長していく際には、親の庇護から脱していくプロセスが必要である。反抗期の必要性が言われるのもこのためだ。その点では理由は何であれ、静雄が母親から離れたのは避けられないことだったとも言える。ただ、大切なはやがてその事実とどう向き合い、折り合いをつけるかだ。二十一歳を迎えていた静雄はその点でかつての反抗期にけりをつける必要があったと言っべきだろう。彼がマザー・コンプレックスという言葉に過剰な反応を示したのも、その点で自分が十分成熟しきれていないことを彼自身が心のどこかで感じていたからに他ならない。

この作品に登場する静雄、佐知子、「僕」はいずれも二十一歳である。作品では、共同生活をしていく静雄と「僕」の中に佐知子という女性が加わり、その中の関係が展開されていくところに話の主軸が据えられている。この三人の関係について極めて示唆的なことを「僕」は語っていた。

いつだったか雨の夜に三人が傘に入って通りを歩き僕が感じたこと、そのうち僕は佐知子をとおして新しく静雄を感じるだろう、と思ったことは本当だった。静雄が母親を見舞って帰ってくれば、今度は僕は、あいつをとおしてもっと新しく佐知子を感じるができるかもしれない。
(傍線・小田島)

三人で一つの傘の中に入ったとき、真ん中にいたのは佐知子である。「僕」と佐知子が恋人となつて間もない頃だった。それまで静雄と共同生活をし、彼を身近に感じて生活していたが、新たに佐知子に加わるることによって静雄を対象化する視点が生まれた。最初の傍線はそういう意味である。

そして今や、これから静雄と一緒に暮らすつもりであることが佐知子から伝えられた。今度は今まで恋人だった佐知子を対象化する可能性を「僕」は想定している。ここには「僕」の願望も込められているだろう。二つ目の傍線はそのことを指している。

ここでようやく、井坂が提示した第一の疑問点について考える地点に辿り着いた。井坂が解説のタイトルを「三人傘のゆくえ」としたのも正鵠を射ている。漱石の『こころ』の場合であれば、「先生」が生活に困窮した友人Kを下宿に受け入れたことでお嬢さんをめぐる三角関係が生じ、「先生」のエゴがむき出しになっていった。それに対し、『きみの鳥はうたえる』ではその種の確執がない。これはなぜなのか。

作品を子細に読んでみると、佐知子の静雄に対する心の動きに対して「僕」が敏感であったことが分かる。

「静雄は飲みだすといつもああなの？」

「今夜はどうかしているんだよ」

僕は彼女の心の動きを感じた。それでさりげない口調になるように努めた。

酔いつぶれて醜態を見せた静雄のことを、そしてあいつが喋ったことや、あいつが見せた子供っぽい態度のことを佐知子は考えているのだ、と思った。僕も静雄のことを思った。あいつはたった今、僕らの汗の匂いや、ぬくみのしみこんだベッドに転がっているのだ。するとなんだか僕は言葉少なになった。

(傍線・小田島)

「僕」はほんの些細なことで佐知子の心の動きを感じ、そのことには気がついていないかのように振る舞うのである。

「僕」が通う店の店長アラも、佐知子について「いい女じゃないか、気だてだつてよさそうだ」と評したうえで、「あんたがそんなふうなら、静雄のほうがそのうち心をつかんでしまったって知らないよ」と「僕」に注意を促すような発言をしていた。このときばかりでない。後に佐知子が静雄と暮らす決心を「僕」に伝えたことを知らないアラは、「この人、静雄にほれてるよ。気をつけたほうがいいよ」とも語っているのだ。アラが静雄のことを嫌っていたわけではない。アラの目から見ても佐知子は「いい女」だし、「僕」が「そんなふう」、すなわち静雄と佐知子が親密になっていくのを気づきながらもそれに気づかぬ態度をとると、大切な恋人を失ってしまう結果になることを憂いていたのだ。最終的にはアラの言葉は現実のものとなる。

佐知子と静雄の関係が変わりつつあることを示す予兆は確かにあった。静雄が佐知子を映画に誘う場面がある。そのことは「僕」も知っており、いわば公認のものだった。真夜中に二人が帰って来たとき、「僕」は二人が階段をのぼる物音で目を覚ました。このとき「僕」は眠ったふりをするが、「外でふたりが抱擁する気配」を「僕」は手に取るように感じているし、「あたしはあんたの女じゃないのよ」「僕と一緒に寝よう、こっちはこいよ」という会話が聞こえてくるし、「なにいつてるの、駄目よ、本当にあんたつて酔っ払いね」との佐知子の言葉に静雄は沈黙している。でもそのあと、佐知子は「あたし、あんたみたいな男、きらいじゃないわよ。でも、眠っているあいだに変なことをしたら、ひどいめにあわすわよ」とも付け加えている。この二人が男と女として接近しつつあるのは確実だった。

では、「僕」はどのような三人の関係のあり方を望んでいたのだろうか。深夜に佐知子と静雄が帰ってくる前に、「僕」はこのように考えている。

静雄はアラの店で僕に、自分だけつんぼ棧敷に置くつもりか、と聞いたかったのだろう。僕らふたりのあいだに佐知子がくわわつて、静雄と僕が仲たがいするようなら考えものだった。そんなことは僕は望んでいない。それをあいつにわからせなければならぬ。

(傍線・小田島)

たとえ佐知子に加わったとしても、静雄と「僕」は仲たがいすることがあってはいけない、これが「僕」の基本的な考え方であった。そのことを踏まえるならば、「僕」が静雄に佐知子を譲ることをあつさり認めたのも頷ける。佐知子から打ち明けられたとき、「僕」は「そうだと思っていたよ。前々からそんな気がしていた」と答えているが、その言葉に嘘はない。そして「きつとうまくいく」と「僕」は付け加えるのだが、これに対して佐知子は「あなたならそういつてくれると思つたわ」と答えている。佐知子は「僕」がこの場合決して取り乱す人間ではないことを確信していた。ちなみに佐知子は「僕」と恋人関係になったときもすぐに店長と会い、別れ話を持ちかけている。二股をかけて遊ぶタイプの女性ではなかった。かつて彼女が「安っぽい女に見ないで」と「僕」に語っていたのはこのことから頷ける。

ところで、静雄と佐知子が一緒に暮らす決心をしたことは佐知子からだけ「僕」に伝えられている。静雄の場合、母親の入院を知らされ、そちらに向かわなければならぬという差し迫った事情があったのは確かである。でも仮に静雄からこのことが伝えられていたら、話の展開は多少なりとも違っていたのであろうか。いずれにせよ、これらは読者の推測の域を出るものではない。

五

共同生活を始めるにあたって、静雄は「僕」のアパートに引っ越してきた。そのとき静雄が持ち込んだのはビートルズのレコード数枚と蒲団だけだった。これが当時の静雄の全財産だったのである。静雄にとつていかにビートルズが大切だったかが分かる。ところが「僕」の部屋にはアンプもプレーヤーもなかった。引っ越してきた当日、プレーヤーがないので歌います、と宣言して彼が歌ったのが「アンド・ユア・バード・キャン・シング (And Your Bird Can Sing)」という

ビートルズの歌だった。この曲の邦題が『きみの鳥はうたえる』であり、この作品のタイトルにもなっている。前掲の福岡はこのことについてこう述べている。

ビートルズは、というよりも、この曲の作者ジョン・レノンが「きみはすべてを聞いたと言ひ、きみの鳥はうたえると言う。でもきみはぼくを理解できない、ぼくの声を聞いていない」と歌っている。この「きみ」（あるいは「あなた」）は、当時いい気になっていたミック・ジャガーのことだという説が有力であるが、ジョンの父親、妻、ファンたちなどと解釈する異説もある。いずれにせよ、「きみの鳥がうたえるとしても、きみはわかっちゃいない」という抗議の歌である。佐藤泰志はたぶんそう受けとっていなかった。「きみの鳥はうたえる、だからきみはいい」。あるいは、「きみの鳥はうたえる、だから大丈夫だ」。そういう肯定的な意味で使っている。

佐藤泰志が「きみの鳥はうたえる」という歌詞を肯定的な意味で使っているという発言はおそらくその通りなのだろうが、福岡はそれ以上を語っておらず何を根拠にそう言っているのかは分からないというもどかしさは残る。

ただ、ここで大切なのは、このタイトルはこの曲を自ら歌っている静雄の姿と密接に繋がっているとすることである。二人の共同生活が始まったとき、「僕」は気の合う静雄と生活空間を共にするという喜びを感じていた。その輝きの時を回想することが「きみの鳥はうたえる」というタイトルが付けられた最大の理由なのではないか。

また、作品の中で一か所だけ「鳥」という言葉が使われる箇所がある。

床に坐って、あいつは顔を洗った。佐知子があんた鳥みたいだわ、とのびやかな声でいった。静雄は黙って水をばしゃばしゃさせていた。

静雄が泥酔した翌朝の場面である。静雄は母親のところへ行かなくてはならない。「僕」は無理やり静雄を起こしたが、まるで精気がなく半病人のようである。

そこで「僕」は佐知子に水の入った洗面器を持ってこさせ、顔を洗わせた。世話の焼ける静雄をややユーモラスに描いていると言ってよいかもれない。また、これから一緒に暮らす佐知子が「あんた鳥みたいだわ」とのびやかな声で言うところ

ころに暗さは感じさせない。

こうして静雄は兄と共に母の入院先へ向かった。静雄が数日経ったら再びここへ戻るつもりでいたことは、駅での別れ際、彼が「僕が帰ってくるまで、おまえをやっつけた奴らに手をだすなよ。すぐに帰ってくるから」と、共同での復讐を口にしてること、さらには四日目に送られてきたハガキに、「もう一度お袋に会ってから帰るつもりだ」と書かれていたことから明らかである。

だが、静雄のこの意向は果たされずに終わった。なぜなら、静雄は兄より早く病院を訪れた際に母親を絞殺し、失踪してしまったからである。「僕」は佐知子が差し出した新聞記事で事件を知った。

なぜ静雄は母親を絞殺することになってしまったのか。これは本人に聞かなければ分からないことであるが、幾つか考えられることはある。

静雄が寄越したハガキによると、母親の面会日は三日おきと決められていた。静雄がハガキを書いたのは母親を見舞った翌日である。それによると静雄の母親は、「衰弱しきっている。この頃は、ひどく暴れるようになったので、注射で眠らせるときは手足をベッドにしぼりつけている。暴れるときは病気の年寄りだとも思えない」状態だった。叔母から母親が精神病院に送られたという事実を手紙で知らされたときも、静雄はかなり動揺し、自分を責めたりした。だが、実際に母親の姿を目の当たりにしたとき、それは静雄の予想をはるかに超える悲惨なものだったのでないかと推測される。静雄のハガキが最後の方は字が乱れ、アルコールを飲みながら書いていることを告白していることから、そのことは容易に想像できよう。

佐知子は「静雄は馬鹿よ」と言いながらも、彼に会いに行くことを決め、住所を頼りに駅の人混みの中に紛れ込んでいった。

失踪中の静雄と連絡が取れたのは、とりあえずひと休みしようと「僕」がアラの店に立ち寄ったときである。静雄は公衆電話から電話を寄越したのだった。このとき、「僕」は金の有無を確かめ、「とことん逃げまくるんだぞ」と言った。だが、電話ボックスを出たところで彼は職務質問を受け、あっさり捕まる。「僕」は静雄に自首を勧めなかった。これはなぜなのだろう。静雄が逃げ切れると考えていたとも思えない。

佐知子は「僕」と別れて静雄と共に暮らすことを選択したが、それはふいに終わった。今後佐知子がどう生きていくのか分からない。ただ明らかなのは、楽し

かつた三人のひと夏の時間がもろくも消え去ってしまったという事実である。

六

『きみの鳥はうたえる』は二〇一八年に三宅唱監督・脚本で映画化され、公開された。佐藤泰志の作品としては『海安市叙景』（二〇一〇年）、『そのみにて光輝く』（二〇一四年）、『オーバーフェンス』（二〇一八年）に続き四作目となる。

既に二〇二一年には五作目として『草の響き』の公開が決定されており、佐藤作品の映画化はすでにパターン化されているような印象さえ受ける。

以前私は『そのみにて光輝く』の原作と映画との違いについて触れ、映画において原作の重要な部分が素通りされていることを指摘したことがある（『蔑視への眼差し、抵抗―佐藤泰志『そのみにて光輝く』論―』、『釧路工業高等専門学校紀要』第五十二号、二〇一九・三）。今回もまた同様の指摘をしなければならぬ。

原作と映画の違いを幾つか挙げていきたい。

一つ目は場所である。原作では佐知子の住むアパートが国立の商業大学の敷地が途切れたところとされている。国立の商業大学ということなら一橋大学がモデルだと考えられる。ちなみに『きみの鳥はうたえる』を執筆していた頃、佐藤は出身地の函館に住んでいたが翌年国分寺市に転居している。一橋大学のある国立市と国分寺市は隣接している。大学生活を東京で送っていた佐藤にとって東京は馴染みの土地でもあった。一方、映画では作品の舞台が函館市となっている。佐藤作品の映画がすべて佐藤の出身地である函館を舞台にしているというのは特筆すべき特徴である。私自身は作品のテーマに重きを置く立場なので、この場所の違いはさほど大きな問題とは捉えていない。むしろ、佐藤泰志という忘れられた作家を復活させるうえで本の復刊と映画化は大きな役割を果たした。その際に函館市民の熱意が大きく作用しており、そのことを踏まえると函館を舞台にしたというのは望ましいことだったとも言える。

二つ目は静雄の母親に関することである。原作では静雄の母親が直接登場する場面はない。この母親は静雄の語りや叔母の手紙などによって間接的に説明されるだけである。一方、映画では母親が直接登場する場面が二回ある。一つは飲み屋で静雄が母親と会話をしているところだ。この母は静雄の兄と同居しており、

この日静雄は兄から借金をすべく待ち合わせをしていた。ところがそこに顔を出したのが母親だったのである。母がいろいろ息子に話しかける一方で息子の方は愛想がない。もう一つは母親が息子となかなか連絡が取れず息子に会いにアパートを訪ねてくる場面である。このとき静雄は外出中で「僕」が対応した。その後、この母親の入院が伝えられるが、映画では持病の発作で倒れたとのことだが命には別条がないという設定になっていた。原作では母親が精神病院に入院したことは大きく異なっている。

そして三つ目として結末の部分を挙げなくてはならない。しかもこれは原作を損なっているとさえ言える。

原作では、前述したように静雄が入院先を見舞いに訪れた際、母親を絞殺して失踪したもののやがて捕まるところで作品は幕を閉じている。ところが映画ではこの肝心な部分が全く描かれていない。

映画では喫茶店で佐知子から静雄とこれから恋人として付き合うことを告げられ、「僕」がそれを受け入れている。ここまでは大筋原作通りと言えようが、店を出て別れたあと「僕」の心に迷いが生じる。佐知子とはじめて待ち合わせたときと呼応するかのように「僕」は数を数え始めるが、やがて我慢できなくなり走って佐知子を追いかける。そして追いついた際に、「おれ、さつき嘘ついた。全部嘘だ。本当に静雄と付き合うのか」と尋ねるのだ。「やめて」と言う彼女に「僕」は「おれ、佐知子のことが好きだ」と告白し、困った表情の佐知子の姿が映し出されて映画は幕を閉じる。

原作では井坂が指摘したように、「僕」が恋人の佐知子を静雄に譲ってしまう理由が明確に述べられていないため、読者に釈然としない印象を与える憾みがあった。おそらく監督・脚本を担当した三宅も同様の感想を持っていて、それが変化に繋がったのだろう。それによって自分の心に正直な「僕」の姿を浮き彫りにできたと一応は言える。また、映画の中ではカラオケボックスで静雄が佐知子に、「佐知子、おれ二人の邪魔していないかなあ」と漏らす場面があった。これなども彼らが三角関係の当事者であったことを明示するために、映画の中で加えられたセリフだろう。

だが、問題は静雄が母親を絞殺してしまう事実がすっかり省かれてしまったことにある。母親が精神病院に入らざるを得ないほど精神的に追い詰められていた背景には、息子たちとの過去が大きく影響していた。『きみの鳥はうたえる』は

「僕」の語りで進められる物語である。「僕」と静雄は親友であったが、静雄があまり語りたがらなかったことも影響して、「僕」は静雄と母親との関係についてあまり立ち入って尋ねることもしなかった。しばしば静雄が捨てたはずの母親に手紙を書いていることも承知していた。気になりながらも深入りしない。それが「僕」のスタンスだったのである。

その一方で、静雄と佐知子が親密になっていくこともうすうす気づきながら、自分から積極的に対処することもなかった。そして佐知子から今後静雄と暮らしていくつもりであることを伝えられたときもそれをあっさり受け入れた。それもまた「僕」のそれまでのスタンスの延長上にあった。

静雄と仲たがいないことが二人の友情関係を維持するうえで必要なことであるという「僕」の考えは理解できないわけではない。だが、そのことを優先させるあまり「僕」が自らの行動に対して抑制的になるのであれば、それは果たして望ましいことなのかという疑問は残る。

静雄の起こした事件は、今まで述べてきた「僕」と静雄の関係を浮き彫りにする出来事でもあった。静雄が捕まったことで、彼と暮らそうと決意していた佐知子はこれからどうすべきか新たな判断をせざるを得ない。そして、「僕」もまた彼らと今後どのような関わり方をしていくべきなのか、考え直す必要に迫られている。原作ではこのような大きな問題が結末で提示されていた。これを素通りしてしまつては原作の魅力を半減させることになるだろう。

『きみの鳥はうたえる』は単行本としては佐藤最初のものであり、いわば文壇デビュー作となった。芥川賞候補作として初めてノミネートされたことも先述した。処女作にはその作家の本質が現れるとよく言われる。その点で、映画の結末部分は佐藤のその本質部分を見えなくさせてしまったと言わざるを得ない。